

菊花の約ちぎり (上田秋成)

戰國時代の話である。播磨はりまの國に丈部左門といふ博學の士がゐた。清貧に甘んじ書物のみを友として老母と二人志高く暮してゐたが、或日、近所の家を訪ねると、壁を隔へだてて人の苦しむ聲こゑが聞える。主によれば、三四日前、旅の武士を泊らせたが、其夜、武士は高熱を發し起臥おきふしも盡ならぬと云ふ。旅の空の病苦は辛からう、様子を見たいと左門が云ふと、疫病かもしれぬとて主は懸念を洩らす、左門は笑つて、「死生命あり」、疫病とて感染うつるとは限るまい、見捨てられぬ、と云つて隣室に入ると、瘦せ衰へた武士が悶え伏してゐる。「必ず救ひまゐらすべし」とて手厚く看病する左門の「愛憐あわれみの厚きに泪なみだ」して、武士は「死すとも御心に報いたてまつらん」と誓ふ。

やがて恢復した武士は己が身の上を語る。赤穴宗右衛門といふ雲州の武士で、雲州富田の城主に仕へてゐたが、雲州の領主たる近江の佐々木氏綱の許に密使として遣はされてゐた時、尼

子經久が富田城を乗つ取つた。そこで氏綱に尼子討伐を勧めたが、臆病な愚將ゆゑ出兵しよう
としないので、氏綱を見限り富田に戻る途次病に罹つたといふ。

左門は宗右衛門が人格識見共に優れてゐるのを知つて大いに喜び、兄弟の誓ひをして交情を
深めるが、初夏の或日、宗右衛門が、雲州の様子を見に一旦歸國し、然る後歸り來つて恩返し
をしたい、九月九日の節句には必ず歸ると約束すると、左門が云ふ、しからば「一枝の菊花に
薄酒を備へて待ちたてまつらん」、必ず「此の日をあやまり給ふな」。

約束の日となり、左門は早朝から宗右衛門を迎へる用意に餘念がない。歸り來てから支度を
しても遅くはあるまいと老母は云ふが、「赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ」、來てから
慌てたのでは恥づかしい、と左門が答へる。だが、宗右衛門は中々姿を現さない。夕方にな
り、諦めかけた左門がもしやとて戸外に出てみると、黄昏の中に宗右衛門の姿が見える。踊り
上つて喜んだ左門が宗右衛門を座につかせて酒食を勧めるが、宗右衛門はそれを斷はり、實は
自分はこの世の人ではないと告げ、死に至つた經緯を語る。富田に戻ると、殆どが舊主を棄て
尼子經久の威に服してゐたが、自分はどうしてもその氣になれず、立去らうとすると、經久は
それを許さず、從弟赤穴丹治に命じて自分を城に押込めさせた。そこで已む無く、自ら刃に伏

し、「菊花の約」を果すべく魂魄こんぱくとなつて會ひに來たのだ、宗右衛門は泪しつつかう語つてかき消えた。

その夜泣き明かした左門は、翌朝、宗右衛門の信義に應へるべく雲州に出立し、赤穴丹治の家に赴き、武士たるもの、「信義をもて重しとす」、然るに「尼子に媚こびて」宗右衛門に「横死わやじをなさしむるは友として信なし」と叫ぶや、丹治に拔打ちに斬りつけ、走り去つたのである。

「雨月物語」中の一篇である。二人の男の「信義をもて重しとす」一途いちつな生き方の激しさは平成の吾々の常識と懸離れてゐるのは無論だが、作者秋成にとつてはどうであつたか。やはり「雨月物語」中の一篇「淺茅あさぢが宿」に出る「一筋に純粹に自己を通してゆく宮木」といふ女は「秋成の性格の投影」だと中村幸彦は書いてゐるが、「菊花の約」の二人も「秋成の性格の投影」なのであつて、それは詰り、人としての眞摯な理想なくして秋成の名作もあり得なかつたといふ事である。貧窮の裡に綴られた最晩年の特異な隨筆「膽大小心録」に於ける辛辣極まる世相批判もそれをはつきりと證してゐる。とまれ、作家が本氣で理想を信じて作品を創る、さういふ事がこの國にも確かにあつた譯だが、さういふ傳統が地を拂つた後に吾々は生きてゐる。